天気造形者【ウェザーメイカー】

玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天気造形者【ウェザーメイカー】

【Ｎコード】
Ｎ３３７４Ｕ

【作者名】
玲

【あらすじ】
元魔導天気予報士のアラウドはとある理由と目的でフェアリーテイルに入る。そして、原作キャラたちとのハチャメチャ生活が始まる！

プロローグ（前書き）

初投稿です（＊＾ｏ＾＊）
ずっーと頭の中で考えていた小説なのですが……いざ文章にすると
難しいですね（＾―＾；）
駄文かもですが、読んでもらえるとうれしいです。

プロローグ

???

「こりゃ一雨くるな…」

男は、空を見上げて唐突に呟いた。朝市で買い物でもしていたのだろう。片手には果物やら何やらが入った紙袋をぶら下げている。

「お客さん、なにいってるんですか？そんな訳ないじゃないですか。」

さっきまで男が立ち寄っていた屋台の亭主が言った。そう、彼の言うとおり、空は晴れ渡り白い雲が泳ぐようにゆっくり流れている。とても雨が降りそうには見えない。

「こんないい天気で雨なんか降るわけないでしょう。」

???

「いいや，俺には分かる。これからどしゃ降りになるぞー。おじさん、濡れないように気をつけてね。」

そう言って男は屋台に背を向け歩き出した。

……傘を差しながら。

「変な人だねぇ。」

ピシャッ

「んっ？」

　ピシャピシャピシャピシャピシャッ

ザザーーザーーザーーーー
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／

「うわっ！な、なんだ！」
「いきなり雨が降ってきやがった！」
「ああくそっ、大事な商品が濡れちまう！」

？？？
「ほら、言ったろう。俺には分かるんだって。」
　男は少し笑いながらそう言うと、ある建物に向かって歩いていった。

？？？
「ここか…」

男は立ち止まった。目の前には、レンガづくりの城のような建物がたくましく建っていた。

「ついたぜ。
『フェアリーテイル』！」

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？
感想や批判、アドバイスなどもらえるとうれしいです。

新たな仲間（前書き）

今回から本格的にスタートです！

新たな仲間

～フェアリーテイル～

「てめぇ！！なんてことしやがる！」

「ああしねぇとギルドが黒こげになっちまうだろうが！」

「あんなくらいの火、俺が食い尽くしてやったのによ！！」

「んな事考えられるのはてめぇだけだろ！！この火吹きトカゲが！！」

「トカゲじゃねぇ！ドラゴンだ！！！この変態ツリ目ヤロー！」

「何だとてめぇ…」

「やんのかコラァ！」

ギルドの入り口近くでマフラーを巻いた髪の赤いツリ目の男と、パンツ一丁のこちらもやはりツリ目の男が朝っぱらから言い合いをしていた。

パンツ一丁の男

「上等だてめぇ……

アイスメイク……」

パンツ一丁の男は左手を開きその上に右拳を乗せて構えた。

「バズーカ！」

男が叫ぶと、氷でできたバズーカが現れた。

パンツ一丁の男

「くらいやがれ！」

ドッカーン！

その時、外から誰かが入ってきた。

キキィー…

???

「おじゃましまー」

マフラーを巻いた男

「当たるかよっと。」

ヒョイッ

???

「ーす、と……ん？ってどぉわはー！！」

ドシャーン

カチーン

入り口から入ってきた男にバズーカが直撃した。
男はカチコチに凍ってしまった。

???

「ちょっとちょっと！誰かに当たったわよ！」

そこに金髪の少女があわてた様子で駆け寄ってきた。どうやら一部始終見ていたようだ。

「「あ？」」

パンツ一丁の男とマフラーを巻いた男がハモった。

パンツ一丁の男
「まねすんじゃねぇよ！」

マフラーを巻いた男
「てめぇこそ被せてくんじゃねぇ！！」

金髪の少女
「人の話聞けー！！」
金髪の少女がツッコんだ。

???
「いい加減にしないか！！！」

「「げっ」」

パンツ一丁の男とマフラーを巻いた男が緋色をしたの長髪の少女を

見て縮みあがった。

マフラーを巻いた男
「エ……エルザ」

エルザと呼ばれた少女は怯えるマフラーを巻いた男に構わず続けた。

エルザ
「お前たち！！ケンカをするのはかまわん。だがな、関係のないものまで巻き込むな！」

「「す、すいません……」」

エルザ
「まったく…
兎に角、こいつを何とかしないといかんな…」

エルザは呆れたようにそう言うと、氷の塊を肘で小突いた。

エルザ
「グレイ、この氷はどれくらいで溶ける？」

グレイと呼ばれたのはあのバズーカを放ったパンツ一丁の男だった。

グレイ
「全力でやったからな……丸一日溶けねぇと思うぜ。」

エルザ
「そうか…
ならばルーシィ。」

そう言うと、エルザは金髪の少女の方を向いた。この少女がルーシィのようだ。

ルーシィ
「なに？」

エルザ
「お前の精霊で氷を真っ二つにできないか？」

ルーシィ
「それやったら中の人も真っ二つだと思いますが！？」
軽いエルザのボケに、すかさずルーシィがツッコんだ。

エルザ
「なるほど…そこまで考えていなかった。」

真顔でエルザが答えた。本気だったのだろうか？

エルザ
「それならばナツ！」

急に指を刺され、マフラーを巻いた男はビクッと体をふるわせた。
彼がナツのようだ。

ナツ
「あいっ！」

エルザ
「この氷を今すぐ溶かせ！」

ナツ
「了解！」
ナツが拳をたたき合わせると、辺りに炎があがりだした。
ナツ
「火竜の……」
ルーシィ
「ちょっとまったー！それじゃ強すぎるんじゃない！？」
ナツ
「咆哮！」
ルーシィ
「だから人の話を聞けー！」
ルーシィの制止も聞かず、ナツは口から炎をはき、氷の塊に放った。

ジュージュー

炎が氷をどんどん溶かしていく。そして、

ドサッ

凍っていた男は、やっと解放され、床に倒れ込んだ。
辺りには肉の焼けたいい香りが漂っている。
グレイがナツの胸ぐらを掴んだ。
グレイ
「おめー加減しろよ！」

ナツ
「い、いいじゃねぇかべつに。ほら、こんがりいい具合に焼けてんじゃねぇか。」
グレイ
「てめぇはこいつをどうするつもりなんだよ！！」

？？？
「う、う～」

「「「「！！？」」」」

男が起きたようだ。

ルーシィ
「ちょ、だ、だいじょうぶ！？」
ルーシィが男に駆け寄る。

？？？
「あ～。え～っと俺どうしたんだろ…確か…フェアリーテイルに着いて……中に入ったらいきなり何かがとんできてそれで……」

グレイ
「……」

グレイが気まずそうにしている。

エルザ
「すまない。私の仲間が失礼なことをして。」

？？？
「いや、俺まだ状況が理解できてないんだけど…」

グレイ
「スマン……」
グレイはことの次第を話した。

ことの発端は、ギルド内の火災だった。初めは火も小さく、誰も気がつかなかった。しかし、徐々に火は大きくなり、気づいた頃にはぼやではすまない大きさになっていた。それを見て目を輝かせたナツは火によっていったが、それに気づかなかったグレイが火に大量の水をかけ無事消化。それでナツが怒りだし、冒頭のケンカに発展したらしい。

グレイ
「ホントスマン……」

ナツ
「まったくてめぇは。周りをちゃんと見ろよな～」

？？？
「そう言えば何だか体が焦げ臭いんだけど…」

ナツ
「すいませんでしたー！」

？？？
「まぁ、もういいよ。」
グレイ

「ほんとごめんな。
あ、俺はグレイ、グレイ・フルバスターだ。よろしくな。」
ルーシィ
「私はルーシィ・ハートフィリア。」
ナツ
「俺はナツだ！！ナツ・ドラゴニル。」
エルザ
「私はエルザ・スカーレットだエルザと呼んでくれ。ところで、お前はなぜフェアリーテイルに来たんだ？」
自己紹介のついでにエルザが尋ねた。
???
「ああそうだ。マスターマカロフは何処にいるか分かる？」
エルザ
「マスターなら向こうの机だ」
エルザは、机の上に座っている老人を指差しながら答えた。
???
「ありがとう。実は俺、このギルドに入りたくて来たんだ。あと、マスターマカロフにも渡すものが。」
エルザ
「そうか、それはうれしいことだ。ならミラも側にいるから受け付けもしてくるといい。」
???

「じゃあそうさせてもらうよ。みんなもついてきてくれないか？マカロフに会うの少し緊張しちゃってさ。」

グレイ
「別に構わねーぜ。」

エルザ
「うむ。いいだろう。」

そうして五人はマスターの元へ向かった。

エルザ
「マスター」

エルザが声をかけると、一人老人がこちらを振り向いた。彼こそがここ、フェアリーテイルのギルドマスター、マカロフである。

エルザ
「この者がフェアリーテイルに入りたいと。」

マカロフ
「ふむ。それは大歓迎じゃ。そいつの名は？」
エルザはマスターの質問に答えようとするが、

エルザ
「……そう言えばまだ聞いておりません。」

？？？

「あれそうだっけ？」

エルザが言うとおり、この男はまだ名乗っていなかった。

？？？

「そう言われてみればまだ自己紹介してなかったな。俺の名前はアラウド。アラウド・クラウセラーだ。」

アラウドと名乗った男を４人はあらためて見回してみる。整った顔立ち、身長は高く１８０ｃｍ後半はあるだろう。体の線は細く、手足も華奢だ。そして一番特徴的なのが赤い髪。髪形はグレイに近い。

アラウド

「前は魔導天気予報士をやってたんだ。」

ルーシィ

「魔導…天気予報士？」

アラウド

「魔導天気予報士って言うのは、魔法を使ったりして天気を予測する人のことだ。魔力の流れやブレで今後の天気を読むんだ。」

ルーシィ

「へぇー凄いウェンディみたい！」

アラウド

「ウェンディ？」

ルーシィ

「うん。ウェンディは天竜のドラゴンスレイヤーでね、天気の変化を感じることができるの。今は出かけてるけど。」

アラウド
「…へぇ天竜のドラゴンスレイヤーか。すごい人がいるんだな。」

ルーシィ
「ウェンディだけじゃなくてね、ナツも実は…」

アラウド
「ああ、それは知ってるよ。火竜のドラゴンスレイヤーでしょ。ナツは有名だしね。」

ナツ
「そ、そうなのか？」

グレイ
「浮かれてんじゃねぇよ。」

アラウド
「それにグレイもね。一目見ただけで君だって分かったよ。」

グレイ
「そ、そうか…」

グレイは満更でもなさそうだ。

アラウド
「そうだよ。パンツ一丁の露出狂なんて一目見て分からない方がおかしいよ。」

グレイ

「なっ、誰だそんなデマ流した奴は！！」

ルーシィ
「いや、寸分の狂いもない事実なんですけど…」

エルザ
「現に今も脱いでるしな。」

グレイ
「うおっ！！」

グレイは自分が裸でいるのに気づいて、驚いた。

アラウド
「あとマスターにこれを。」

マカロフ
「ん？なんじゃ？」アラウドは一枚の紙切れを手渡した。

アラウド
「マドラス局長からの委任状です。俺がギルドに入るのを断られるといけないから、と。」

マカロフ
「そんな物寄越さずとも大歓迎じゃといっておろうに。」

そう言ってマカロフは紙の裏に目を通し始めた。するとマカロフの顔が少し険しくなったような気がした。

マカロフ
「よし分かった。なら早速手続きをせねばな。おーいミラ、頼む。」

ミラ
「は～い」

マカロフに呼ばれた女性、ミラはアラウドに手続きの説明を始めた。

ミラ
「最初のうちは誰かとチームを組むといいわよ。」

アラウド
「チームか、ナツ、ルーシィ、エルザ、グレイ、４人はチーム組んでるんだよな？」

ナツ
「ああ、そうだぜ。」

アラウド
「じゃあ俺をチームに入れてくれないか？」

ルーシィ
「もちろんよ。ね、みんな？」

グレイ
「オウよ。」

エルザ
「なかなか見込みもありそうだしな。」

ナツ
「ええとちょっとまて。まだ一人足りないんだよ。いや、一匹か。おーいハッピー」

ハッピー
「あ～い」

返事をしながら現れたのは…猫だった。

アラウド
「お～。猫が喋って歩いてる。」

アラウドは特に驚いた様子を見せず、かる～く言ってのけた。

ハッピー
「ナツー。なんかこの人リアクション薄いよ～おいらつまんないや。」

アラウド
「あ、ごめん。え～と…ね、猫が！あ、歩いてるし喋ってる！！」

ハッピー
「ナツー。この変な人何者なの～？おいらついていけないよ～」

ナツ
「そんな事言うなよハッピー。これからこいつも一緒に仕事すんだぞ」

アラウド
「そう言う事なんだ。俺はアラウドよろしくなハッピー。」

ハッピー
「あ〜〜い♪」

ミラ
「じゃあ最後に、フェアリーテイルのマークはどこにいれる？」

アラウド
「じゃあここがいいな。」

アラウドは右手の甲を差し出した。

ミラ
「ＯＫ．いくわよ。」
ミラはアラウドの右手に鉄の板のようなものを押し付けた。そして、
離すとそこにはフェアリーテイルのマークがクッキリ。

ミラ
「これでよし。ようこそフェアリーテイルへ！」

アラウド
「これからよろしくな、みんな！！」

四人と一匹
「「「「「オウ（うん）！！！」」」」」

こうしてアラウドのフェアリーテイルでの生活が始まった

新たな仲間（後書き）

ようやくオリキャラの名前が出せました……（^。^；）。

「？？？」書くの大変だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3374u/

天気造形者【ウェザーメイカー】

2011年10月9日10時27分発行